



充実した「夏の自由研究」

部長 大塚 俊明

新学期が始まり、早くもひと月が経とうとしています。ここ数年の傾向に違わずと言いましょいか、さらに輪をかけるように、9月も半ばを過ぎても国内では猛暑日が記録されました。私たちの季節感も大きく変わりつつあり、これからは「9月までが夏」として暦に定着していくのかもしれませんが。

さて、夏休み明けの9月、各教室前の廊下を彩るのは子どもたちの「夏休みの自由研究」の展示です。以前からその評判は耳にしておりましたが、実際に目にすると予想以上の充実ぶりで、思わず足を止めてしまいました。さらに授業時間を活用した「研究発表会」も全学級で行われており、いくつかの発表を直接聞かせてもらうこともできました。そこで、感心した点をいくつかご紹介します。

1点目は、テーマの設定です。ユニークで目を引くものが数多く見られました。自分の体験や関心をもとに研究をまとめており、「うどんのこしの研究」「ぼくの骨折が治るまで」「通学路の標識の研究」などの探究が並びます。こうした日常生活で感じた「ふしぎ」から研究が生まれていることに、感心させられます。例えば、「脳のやくわり」をテーマにした研究では、バスケの練習中に父親から「左手を使うと左脳が発達する」と聞いたことをきっかけに、脳を調べてみようと考えた経緯が記されていました。研究はまず動機が大切であり、その出発点こそ子どもたちの主体性や探究心が映し出されているのだと感じます。

2点目は、実証的な研究がなされていることです。「竹がさは本当にすずしいのか」という研究では、竹がさ、体育で使用する赤白帽子、白布地の帽子を用意し、それぞれの表面と裏地

の温度を気温や時刻と関連付けながら細かく記録して比較していました。また、バスケットボールの「リバウンドを制する者はゲームを制する」という言葉に着目し、34試合のデータを分析してリバウンド数と勝敗の関係を調べる研究もありました。いずれも「本当なのか？」と問いかけ、子どもなりに証明しようとする姿勢が感じられる力作でした。

3点目は、調べたことを自分の考えにつなげている点です。「選挙ってどんなもの」という研究では、選挙を調べる過程で憲法に触れ、その改正について自分の意見をまとめていました。教室内で直接発表を聞くことができた「磯子火力発電所」の研究では、諸外国と日本の発電方法の比率を比較し、今後の日本の発電の在り方について堂々と意見を述べる姿も見られました。単なる調べ学習にとどまらず、自分なりの問題意識へと発展させている点に大きな成長を感じました。

全てを紹介することはできませんが、どの研究からも子どもたちの情熱が伝わってきました。友だちの研究に刺激を受け、互いに学び合うことで、さらに豊かな探究が広がっていることでしょう。

冒頭酷暑について触れたところですが、彼岸を迎えて朝の冷気に秋を感じるようにもなってきました。読書の秋、スポーツの秋といわれますが、もちろん学習にも最適な季節を迎えます。4年生の宿泊体験学習や、子どもたちが楽しみにしている遠足も控えています。思い出に残る行事となるよう、ただいま準備を進めているところです。

10月もどうぞよろしくお願ひいたします。

※「研究名」等は漢字表記に変換したものもあります